

新 いわた

文化財だより 第23号

磐田市教育委員会文化財課 平成19年2月1日発行

◎目次◎

企画展「和鏡 - 渡邊晁啓コレクションⅡ - 」P1・2

思わず人に話したくなる磐田の文化財

- 第22回 鱧口 P3

「第2回神谷みつ人形展」 P4

コラム -国分寺の瓦- 神谷英雄 P4

企画展 「^{わきょう}和鏡^{ともひろ}-渡邊晁啓コレクションⅡ-」 開催



鏡のはじまり

鏡の起源は古く、鏡が初めて作られたのは今から約 3,000 年前の中国です。当時、使われていた青銅器の模様を取り入れたもので、中国・戦国時代(紀元前 403～前 221)になり多く作られるようになります。この時代の鏡は、戦国式と呼ばれ、薄く加工した青銅の片面を磨きあげ鏡面とし、背面に様々な模様を施しました。

中国・漢の時代(紀元前202～後 220)に作られた鏡(漢鏡)は、日本をはじめアジア周辺に持ち運ばれました。日本には、弥生時代ごろに中国や朝鮮から持ち込まれ、これらを模倣した鏡も作られました。鏡は姿を映す実用品ではなく、神聖なもの、権力の象徴として使われていました。

「和鏡」とは

日本で作られた鏡のうち和風の様式が取り入れられた平安時代から江戸時代にかけての鏡を「和鏡」と呼びます。

和鏡が登場する平安時代は、遣唐使が廃止されるなど政治的・社会的要因から、国風文化が生まれ、鏡も中国の影響を受けたものから、松、菊、鶴、雀などの和風の図柄を取り入れたものに変化していきました。当時の鏡は経塚や墓に納められたり、寺社などで宗教的な道具として使われたりするなど、まだ一部の人たちが使う道具でした。

平安・鎌倉時代の鏡の形は円形が中心で、室町時代になると円鏡に柄をつけた柄鏡えかがみが作られるようになりました。江戸時代になると柄鏡が主流となり、化粧道具として広く一般庶民に使われ、鬘まげなど髪型の変化とともに鏡面も次第に大型化していきました。



双竹柄鏡

和鏡の図柄

鏡の姿を映す面の反対面を「鏡背」と呼びます。鏡背にはさまざまな動物や植物などが描かれていますが、何が描かれているか探しながら鏡を鑑賞してみてください。



鶴



扇



亀



松



竹



梅

企画展 「和鏡 -渡邊晁啓コレクションⅡ-」

日時 平成19年2月3日(土)～2月18日(日) 9:30～17:30
月曜日休館(2月5日・12日)

会場 豊田図書館1階展示室(磐田市上新屋304)

思わず人に話したくなる磐田の文化財 第22回 鰐口編 わにくち

今回は市内豊浜（大島観音堂）にある鰐口を紹介します。もともと大安寺にあったこの鰐口は昭和31年10月に静岡県の文化財（工芸品）に指定されました。

鰐口とは？

鰐口は神社や寺院の拜殿・堂の前面の^{はいでん}高い所に吊るされており、参詣者は綱を振って鰐口を鳴らします。円形で中が空洞になっており、下側に縁のついた大きな口が開いています。鰐口は打金、金鼓とも呼ばれます。



鰐口

「ワニ」？それとも「サメ」？

鰐口は下側の口が鰐の口に似ているから鰐口と名付けられたといわれていますが、鰐口の鰐という漢字はハ虫類の「ワニ」を意味します。日本には在来種としてのワニはいませんが、昔の日本にはワニがいたのでしょうか？



ワニの口？

江戸時代の百科事典「和漢三才図会」^{わかんさんさいずえ}に鰐口は「鰐の口に似ているため鰐口と名づけた」と、鰐については、「^{とかげ}蜥蜴に似て大きく…、人を襲う」と記載されていることから、江戸時代にはワニについて知られていたようです。

また、海の神様である金毘羅（^{こんびら}宮毘羅とも言う：^{やくしにょらい}薬師如来十二神将の一つ）はもともとインドの神様クンビーラに由来するようですが、クンビーラはサンスクリット語で「ワニ」を意味するようです。

日本最古の歴史書の古事記にも和邇^{わに}という言葉が見られ、「^{いなば}わに」「^{うさぎ}うさぎ」という言葉は古くから使われていたようです。皆さんご存知の神話「因幡の白兔」にも和邇が登場します。

しかし、こちらの和邇は諸説いろいろありますが、サメとも考えられており、山陰地方ではサメのことを「わに」と呼ぶようです。

鰐口の銘が初めてみられるのは鎌倉時代で、実際鰐口の鰐はどちらを意味するのかわかりませんが「ワニ」も「サメ」も大きな口をしているのはまちがいありません。

静岡県で5番目

静岡県内の古い鰐口

静岡県内には現在、県指定文化財の鰐口が26口あり、そのうち最も古いのが、静岡市一溪寺の正安4年（1302）の年号が刻まれたものです。大島観音堂にある鰐口には延文5年（1360）の年号が刻まれています。県内でも5番目に古いものになります。

1	一溪寺（静岡市）	正安4年（1302）
2	^{いいむろの} 飯室乃神社（牧之原市）	^{ぶんぼ} 文保3年（1319）
3	^{ふしょうじ} 普照寺（南伊豆町）	^{げんおう} 元応2年（1320）
4	^{ちじやさん} 智者山神社（川根本町）	^{じょうわ} 貞和3年（1347）
5	大島観音堂（磐田市）	延文5年（1360）

第2回神谷みつ人形展を開催中

現在、「第2回神谷みつ人形展」を旧赤松記念館で開催しています。企画展では神谷みつ氏が制作し、昭和58年に市へご寄贈いただいた「さくら人形」を展示しています。

神谷みつ氏は約40年もの間人形制作に打ち込まれ、人形制作以外に文学や美術にも造詣が深く、画家の平野ちくいつ竹逸氏などとも交流をもっていました。

今回展示している「さくら人形」とは、布製の顔をもった人形であり、木彫人形作家のぬのせい小松康城氏(1915～1979)が昭和初期に創始したものです。人形は日本古来の伝統的な美しさと新しいセンスを併せ持ち、当時多くの人に親しまれました。髪型やポーズも自由な形に作ることができ、衣装や小道具なども好みのものが選べるので、作者の個性や工夫が生かしやすいものでした。

写真の人形はさんぼそう三番叟と名付けられており、歌舞伎の「三番叟物」を題材としています。このほかにも「黒田節」や「お七」など、さんぼそうもの謡曲・芝居などを題材にしたものが数多くあります。

企画展は3月11日まで開催しておりますので、ぜひ一度ご覧下さい。(旧赤松家記念館休館日:月曜日・祝日の翌日)



三番叟

コラム 一 国分寺の瓦 神谷英雄

先月の文化財だよりの特集でも紹介しましたが、現在遠江国分寺跡の発掘調査を行っています。

今年度の調査は2月で終了しますが、こんどう現在金堂跡の調査を行っています。以前、年配の方たちにお話を伺った時、「昔は国分寺跡地に瓦がゴロゴロいっぱい転がっていたよ」なんてお話を聞いていたのですが、現場にいったらビックリ！本当に瓦がどっさり出土しています。瓦というとはどうしても灰色の瓦をイメージしてしまうのですが、ここで出土している瓦は白や茶やもちろん灰色など色とりどりです。なぜこんなに色が違うのかといえば、窯での焼き具合が均一ではないため、瓦の色が違ってしまふということなのです。

国分寺といえば統一された色のきれいな屋根を勝手にイメージしていましたが、当時の屋根はパッチワークみたいだったのでしょうか。



瓦がいっぱい

編集後記：

特集で紹介しました和鏡展が2月3日から豊田図書館で開催されます。2週間と期間は短いですが、ほかではなかなか見ることができない鏡のコレクションですので、ぜひ皆さん一度会場に訪れてみてください。(ひ)

発行：磐田市教育委員会文化財課
(磐田市埋蔵文化財センター)
住所：〒438-0086 磐田市見付 3678-1
電話：0538(32)9699
FAX：0538(32)9764
Mail：bunkazai@city.iwata.lg.jp